

多賀城市文化財調査報告書第66集

西 沢 遺 跡 ほか

－西沢遺跡第10次－

－山王遺跡第38次－

－新田遺跡第21次－

－矢作ヶ館跡第1次－

平成14年3月

多賀城市教育委員会

序 文

多賀城市では、「活力とふれあいのまち 史都・多賀城」を将来都市像として、史跡のまちにふさわしいまちづくりに向け、歴史的遺産の活用と継承に努めています。特別史跡をはじめ、市内に所在する遺跡は、本市の歴史を物語る重要な歴史的遺産であり、それを調査研究してまちづくりに生かしていくことが大切であると存じます。

さて本書は、平成13年度に国庫補助事業として実施しました、西沢遺跡・山王遺跡・新田遺跡・矢作ヶ館跡の発掘調査報告書です。今回調査を行いました4遺跡につきましては、開発計画の内容によって調査のあり方もさまざまありますが、一つ一つの調査の積み重ねが遺跡の解明につながり、ひいては本市の歴史像に迫れるものと期待しております。

本書が文化財関係者のみならず、市民の皆様の文化財に対する理解の一助となれば幸いです。最後になりましたが、発掘調査や報告書の作成にあたり、多大なご指導・ご協力いただきました皆様に対し、厚く御礼申し上げます。

多賀城市教育委員会

教育長 櫻井 茂男

例　　言

1. 本書は、平成13年度の国庫補助事業として実施した、西沢遺跡第10次・山王遺跡第38次・新田遺跡第21次・矢作ヶ館跡第1次調査の成果をまとめたものである。
2. 遺構の名称は第1次調査からの連続する番号である。
3. 本書中で使用した遺構の種類を示す記号は、以下のとおりである。

SA：柱列跡 SB：建物跡 SI：竪穴住居跡 SK：土壤跡 SD：溝跡
4. 平面図における座標値は、国家座標「平面直角座標系X」を用いて設定した。
5. 掛図中の高さは、標高値を示している。
6. 土色は、『新版標準土色帖』(小山・竹原：1991年)を使用した。
7. 柱痕跡が確認されていない建物の方向・柱間は、柱位置を柱穴の中央に想定して計測した。
8. 瓦の分類は『多賀城跡 政庁跡 本文編』(宮城県多賀城跡調査研究所 1982年)に掲る。
9. 本書の執筆は調査員全員の協議のもとに、I・II・Vを若松啓文、IIIを高橋圭蔵、IVを石川俊英・若松啓文が担当し、編集は若松が行った。
10. 西沢遺跡第10次調査の鉄滓状付着物の分析・調査は、川鉄テクノリサーチ株式会社に依頼した。
11. 本書の作成に際し、天野順陽氏・千葉直樹氏(宮城県教育庁文化財保護課)、本田裕之氏(塩竈市教育委員会生涯学習課)の協力を得た。
12. 調査に関する諸記録及び出土遺物は、すべて多賀城市教育委員会が保管している。

目 次

I. 各遺跡の概要	1
II. 西沢遺跡第10次調査	3
III. 山王遺跡第38次調査	24
IV. 新田遺跡第21次調査	26
V. 矢作ヶ館跡第1次調査	28

調査要項

調査主体 多賀城市教育委員会 教育長 櫻井茂男

調査担当 多賀城市埋蔵文化財調査センター 所長 高倉敏明

遺跡名	所 在 地	調査面積	調査期間	調査員
西沢遺跡 第10次	市川字伊保石地内	約481m ²	平成13年8月23日～9月27日	石川俊英・若松博文
山王遺跡 第38次	山王字西町前34-32	約 28m ²	平成13年9月12日～9月18日	高橋圭藏
新田遺跡 第21次	新田字一里塚25-5	約 13m ²	平成13年9月25日	石川俊英・武田健市（文化財課）
矢作ヶ館跡第1次	留ヶ谷二丁目地内	約817m ²	平成13年10月4日～10月5日	石川俊英・若松博文 武田健市（文化財課）

調査協力者 佐藤丑之助 佐藤信男 工藤伸二 只野俊雄 鈴木文雄 ㈱大和ハウス工業

調査参加者 赤間栄二郎 浅野 忠 芦野しづ子 阿部胞吉 速藤 実 大友良子
長田栄太郎 小野玉乃 小幡 武 熊谷サツキ 菅原綱代 千葉享一
角田静子 南城美岐子 福永孝二 薩田恵子 真野勝雄 渡辺ゆき子

整理参加者 伊藤美恵子 内海由美子 遠藤友美 小野寺雪子 鹿野智子 須藤美智子
高橋知賀子 中村千恵子 村上和恵 横山佳織 渡邊奈緒

I 各遺跡の概要

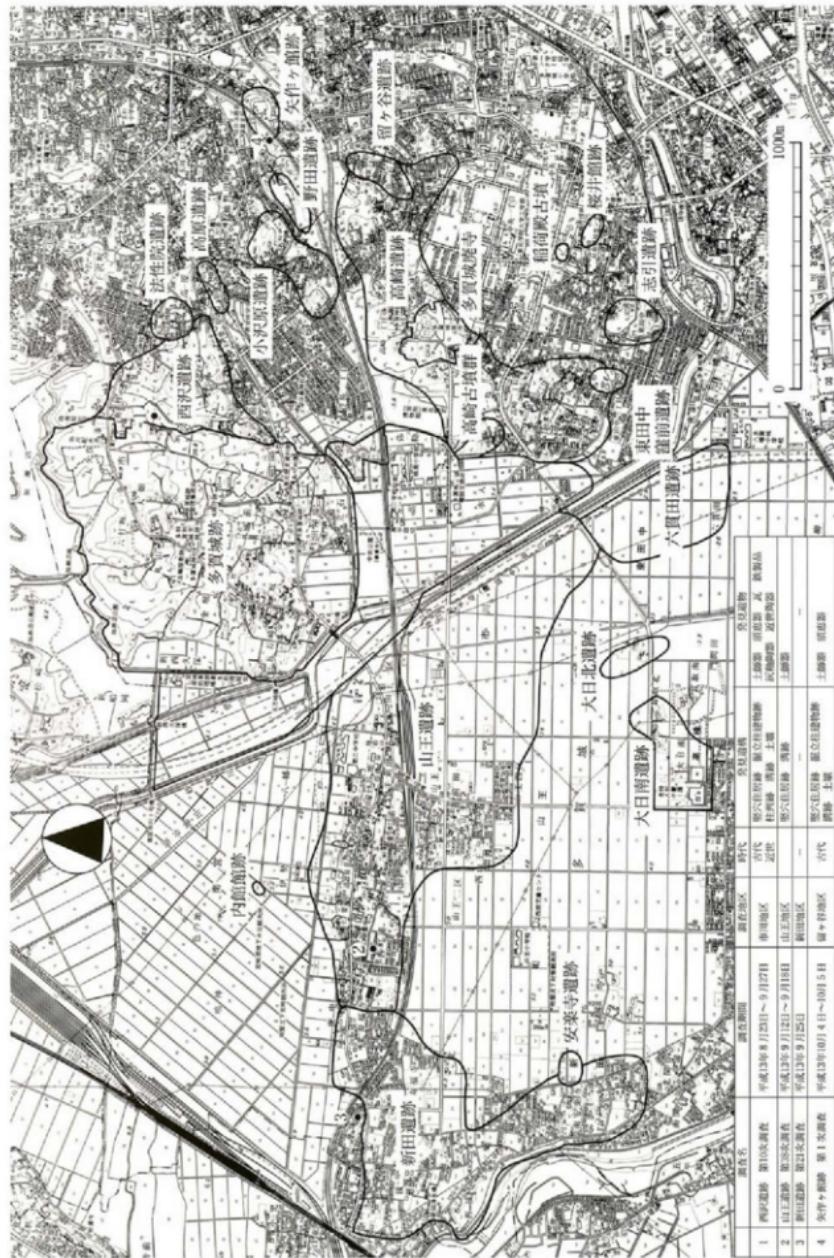
西沢遺跡は多賀城市市川、浮島両地区に所在する、東西450m、南北700mの範囲に及ぶ遺跡である。標高は約6～46mの低丘陵上に立地し、丘陵斜面に大小の沢が入り込んだ地形を呈している。本遺跡は特別史跡多賀城跡の東側に隣接し、東側には遺物散布地の法性院遺跡、高原遺跡が所在する。本遺跡は9次にわたる発掘調査が実施されており、古代から近世にかけての遺構・遺物が多数発見されている。特に平安時代の鍛冶工房跡を含む竪穴住居跡や掘立柱建物跡は、多賀城との関連をうかがわせるものである。今回の調査は、本遺跡の西端部に位置する標高約26～30mの丘陵南斜面において実施した。

山王遺跡は多賀城市山王、南宮両地区に所在し、東西約2km、南北約1kmの広範囲にわたる遺跡である。旧七北田川と砂押川によって形成された東西に長い自然堤防上に立地しており、標高約4mである。本遺跡は市川橋遺跡、新田遺跡、高崎遺跡とともに大規模な集落群を形成しており、これまでの発掘調査では、古墳時代から近世にわたる遺構・遺物を多数発見している。特に平安時代の国守館跡の発見は、注目される成果である。今回の調査区は、本遺跡の西側自然堤防の南辺に位置する。

新田遺跡は多賀城市新田・南宮・山王地区に所在し、東西0.8km、南北1.6kmに及ぶ遺跡である。本遺跡は七北田川によって形成された自然堤防が発達した地域で、標高6～8mである。本遺跡はこれまでの発掘調査から、縄文時代から近世までの複合遺跡であることが判明している。とりわけ、大溝で区画された中世の屋敷群の発見は、本市の中世史を考える上で欠くことのできない情報を提供している。今回の調査区は、自然堤防の北端部に所在し、埋蔵文化財包蔵地の境界付近にあたる。

矢作ヶ館跡は多賀城市留ヶ谷地区から塩竈市袖野田地区にかけて所在し、東西200m、南北150mに及ぶ遺跡である。本遺跡は東西にのびた低丘陵の東端部に位置し、標高3～25mと起伏に富んでいる。現在は東北本線によって南北に分断された状況になっている。本遺跡の西側には古代・中世の複合遺跡である野田遺跡が所在し、その南西に位置する留ヶ谷遺跡も古代から近世の複合遺跡である。本遺跡は『風土記御用書出』(1774年)記載の「屋はきか館」に比定されており、遺跡分布調査では古代の遺物が採集されていることから、古代・中世の複合遺跡として登録されている。今回の調査は本遺跡の北西側丘陵部（東北本線北側の丘陵部）で実施した。

第1図 調査区位置図



II 西沢遺跡 第10次調査

1 調査に至る経緯と経過

本調査は個人住宅建設に伴うものである。複数年計画の国庫補助事業として実施されてきており、今年度で5ヵ年目となる。当該地は西沢遺跡の範囲内にあるものの、過去の調査成果から、丘陵斜面は後世の削平などによって遺構の残存状況が悪く、遺構密度も希薄であることが指摘されていた。

6月22日に今後の土地利用及び発掘調査等について、地権者、文化財課、埋蔵文化財調査センターの三者間で協議を行ったところ、地権者から盛土造成後に住宅建設を行うとの回答があった。これを受け、遺構の存在を確認するための確認調査を行うことで協議を進め、地権者の同意が得られたことから今回の調査に至ったものである。今回の調査は、遺構の有無の確認及びその分布状況の把握を目的としたため、遺構内埋土の掘り下げや断ち割りなどは最小限にとどめたが、遺構の性格を明確にするために精査に及んだものもある。

調査は8月23日より開始した。まず重機による表土除去作業を行ったところ、調査区東側では表土下で地山が現れた一方、西側では堆積層を確認し、その上面で遺構も認められた。北半部及び東端部では遺構を確認した。8月27日から作業員を導入して調査機材を搬入し、遺構検出作業を開始した。9月3日より遺構の精査に入り、隨時図面作成、写真撮影を行った。9月12日より調査区北半部の竪穴住居跡の調査に着手し、精査を行った。9月27日に図面作成、写真撮影を終了した後、遺構保護のため山砂で埋め戻し、すべての調査を終了した。

なお、調査区中央に実測図作成のための原点（X=-188,040m Y=14,307m）を設置し、これを通る南北及び東西方向の軸線をそれぞれの基準線とした。以下、本文中では原点より北側を北半部、南側を南半部、L字状に東へ突出した部分を東端部、原点周辺を中央部と呼称する。

2 調査成果

(1) 基本層序

調査区東側及び東端部は表土下で直ちに地山である岩盤が現れたが、調査区西側は沢状地形となっており、その部分には堆積層が確認された。層序は5層に大別でき、細分できるものは新しい順にa、b、cと枝番号を付けた。詳細は以下のとおりである。

I a層 表土層。暗褐色シルトで、層厚0.6～1.3mである。

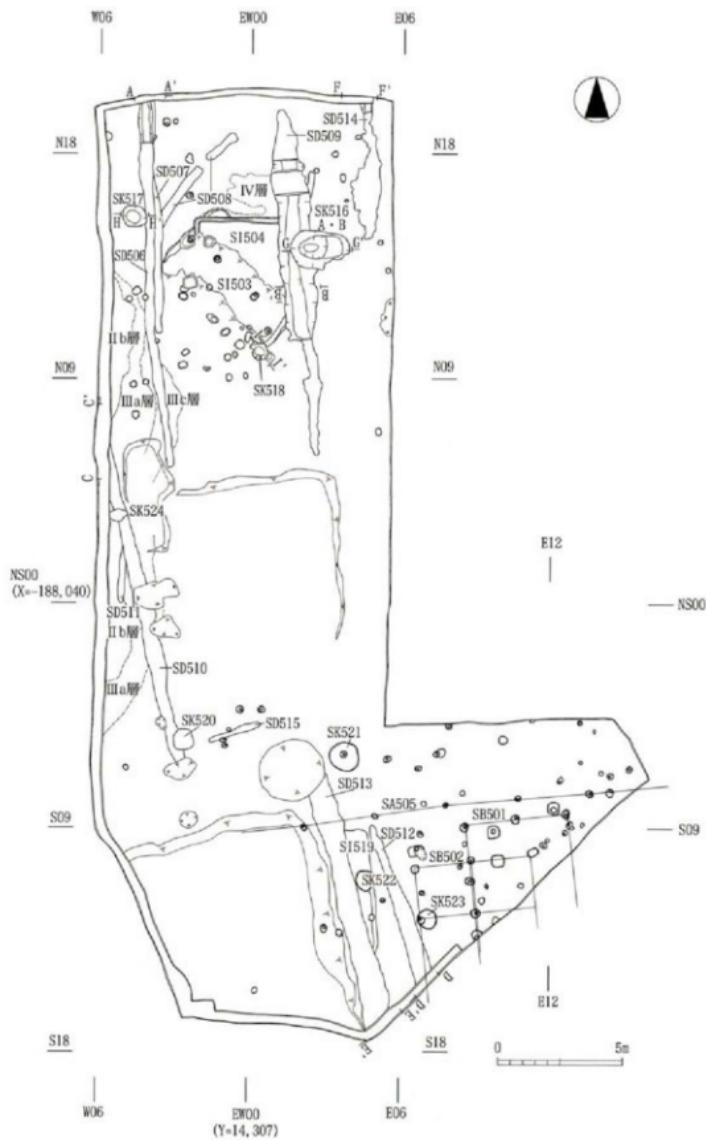
I b層 調査区東端部にのみ堆積する旧耕作土層。褐色シルトで、層厚4～10cmである。

II a層 調査区西側に堆積する暗褐色シルトで、層厚15～32cmである。

II b層 調査区西側に堆積する暗褐色シルトで、層厚10～40cmである。ブロック状の岩盤や小礫を含む。古代～近世以降の遺物を含むことから、近世以降の堆積層とみられ、SD510溝跡の検出面となっている。

III a層 調査区西側に堆積する暗褐色シルトで、層厚10～30cmである。岩盤細粒、小礫を含む。古代の遺物を若干含む。

III b層 調査区西側に堆積する黒褐色土で、層厚10～35cmである。古代の遺物を若干含む。西壁の断面でのみ確認し、平面的には検出できなかった。



第2図 調査区全体図

- III c層 調査区西側に堆積する暗褐色シルトで、層厚20~40cmである。SD506溝跡の検出面となっている。
- IV層 調査区北半部中央に堆積する褐色シルト質土で、層厚5~10cmである。古代の遺物を含んでいる。SI504竪穴住居跡付近でのみ確認したものであり、同住居跡を覆っている。
- V層 黄褐色ないし褐色の地山岩盤層である。

(2)発見遺構と遺物

①竪穴住居跡

調査区北半部の地山面で重複する2軒の竪穴住居跡を検出した。竪穴住居跡は後世の削平と擾乱がひどく、残存状況が悪かった。以下、古い順に述べていく。

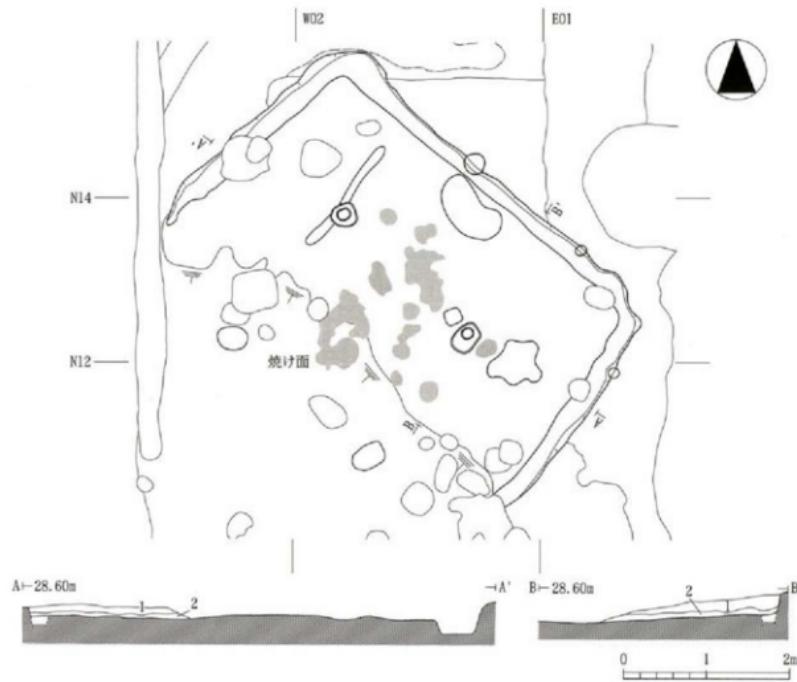
SI503竪穴住居跡

調査区北半部の地山面で検出した住居跡である。北東側の約半分が残存しているのみで南西側が削平を受けて消滅している。調査は住居内埋土を除去して床面を検出し、周溝や主柱穴については平面的な検出にとどめた。本住居跡はSI504竪穴住居跡、SD509溝跡、SK518土壤と重複しており、これらより古い。規模は北東辺で約4.9mであるが、平面形は不明である。方向は北東辺でE-47°-Sである。床面は地山を削り出したままのものであり、中央部分に多数の焼け面を確認した。埋土は2層に細分できるが、いずれも地山粒を含むことから、人為的に埋め戻されたものとみられる。周溝は壁面に沿って検出しており、幅は10~36cmである。周溝内で直径13~25cmの小柱穴を3基確認した。壁は垂直に立ち上がり、残存壁高は49cmである。カマドは確認されなかった。主柱穴は4基確認され、北東側の2基では直径14~16cmの柱痕跡を確認できた。遺物は住居内埋土から土師器杯・甕、須恵器杯・甕・長頸瓶、丸瓦(II B類)、土錐、鉄製品が出土している。土師器はすべてロクロ調整されたものである。

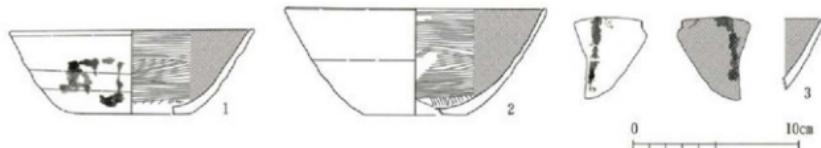
なお、床面上で小溝、土壤を検出したが、本住居跡に伴う遺構であるかどうかは不明である。

SI504竪穴住居跡

調査区北半部で検出した住居跡である。北東部はIV層に覆われて残存状態が良好であるが、南西部は削平されている。SI503竪穴住居跡、SD509溝跡、SK516土壤と重複しており、SI503より新しく、SD509、SK516より古い。規模は東西約4.5m、南北3.5m以上であるが、平面形は不明である。方向は、北辺で東西基準線とほぼ一致している。床面は、地山を削り出したままの状態であり、貼床は確認できなかった。SI503と重複する部分では、その埋土が露出した状態になっている。周溝は北辺と東西各辺の一部で確認でき、幅は14~25cmである。壁は垂直に立ち上がり、残存壁高は19cmである。カマドは確認されなかった。主柱穴は4基確認したが、抜き取り穴の規模が大きく、掘り方を確認できたものは1基のみである。確認できた掘り方は、一辺約40cmの方形である。埋土は地山ブロックを含むので、人為的に埋められたものとみられる。遺物は住居内埋土から土師器杯・小型杯・高台付杯・甕、須恵器杯・蓋・甕が出土しており、土師器高台付杯(第7図6)は口縁部が外反して、体部に張りがあり、高台は断面がわざかに外側に開く角高台である。このような器形は多賀城周辺で出土する土師器高台付杯とは器形が異なり、須恵器にも類例を見出せない。器形的には灰釉陶器や綠釉陶器など施釉陶器に近似しており、それらを模倣した可能性がある(註1)。

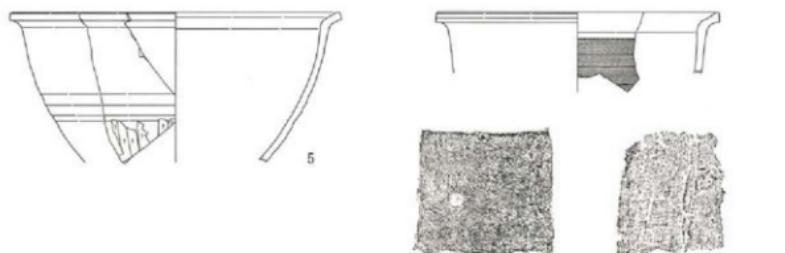
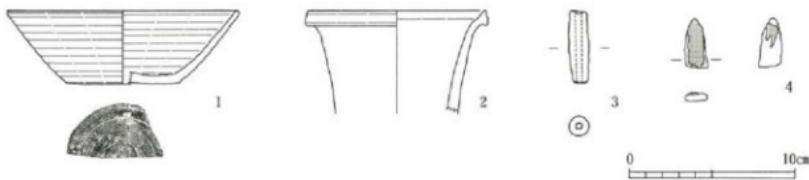


第3図 SI503竪穴住居跡



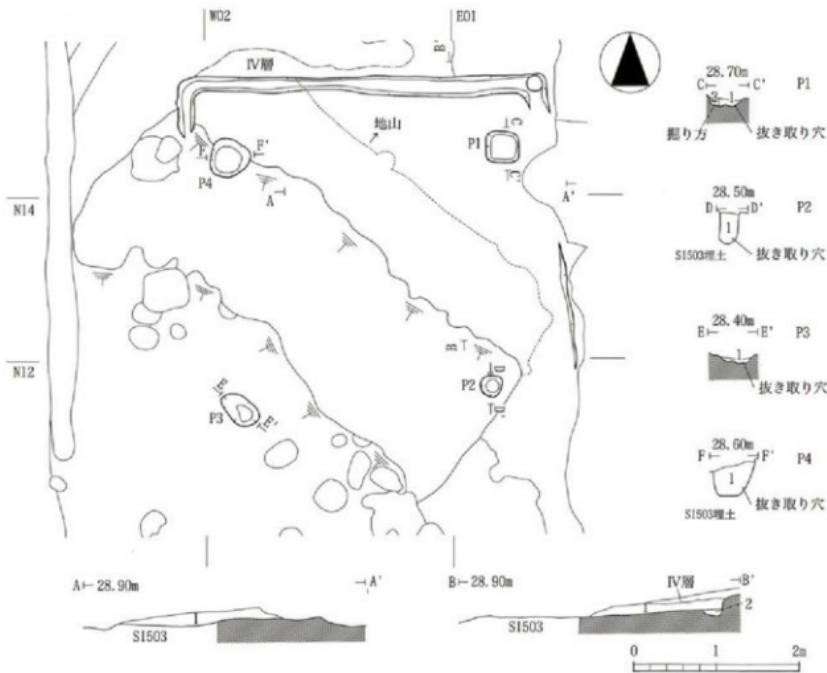
No.	遺物	層位	種別	基準	特徴	口徑 (保存値)	底径 (保存値)	高さ	写真回数	登錄番号
1	SI503	I-I	土器部	杯	【外面】ロクロナデ→泥漬 【内面】ヘラミガタ→黑色處理	(14.8) (14/24)	(7.0) (9/24)	5.15	2-1	R-2
2	SI503	I-I	土器部	杯	【外面】ロクロナデ→泥漬 【内面】ヘラミガタ→黑色處理	(15.8) (6/24)	(6.2) (6/24)	6.45	-	R-1
3	SI503	I-I	土器部	杯	【外面】ロクロナデ 【内面】ヘラミガタ→黑色處理→油漬付着	-	-	-	2-5	R-3

第4図 SI503竪穴住居跡 出土遺物



No.	遺構	層位	種別	特徴	参考	口径 (段存率)	底径 (段存率)	器高	写真図版	登錄番号
1	SI503	1-1	須恵器	杯	【外観】クロロナデ・底部:ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	- (14.1) (2/24)	(6.9) (7/24)	-	-	R-12
2	SI503	1-1	須恵器	長柄瓶	【外観】ロクロナデ→タキ→ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	- (10.6) (8/24)	-	-	-	R-25
3	SI503	1-1	土師		【表図】オサエ	重量 5.0g	直径 4.35	孔隙 1.20 0.45	2-6	R-29
4	SI503	1-1	鉄製品	不明	木質付造	-	-	-	2-7	R-1
5	SI503	1-1	須恵器	甕	【外観】ロクロナデ→仰頭下平へラケズリ 【内面】ロクロナデ	- (32.8) (1/24)	-	-	-	R-27
6	SI503	1-1	須恵器	甕	【外観】ロクロナデ→仰頭ハケズリ 【内面】ロクロナデ→仰頭ハケズリ	- (26.6) (4/24)	-	-	-	R-28
7	SI503	1-1	須恵器	長柄瓶	【外観】ロクロナデ→仰頭ヘラケズリ 底部:高台貼付け 【内面】ロクロナデ	-	- (9.9) (6/24)	-	-	R-36
8	SI503	1-1	丸瓦		【外図】粘土絆織→布目 【内図】ロクロナデ	日B型 玉縁留痕	-	-	-	R-31

第5図 SI503竪穴住居跡 出土遺物

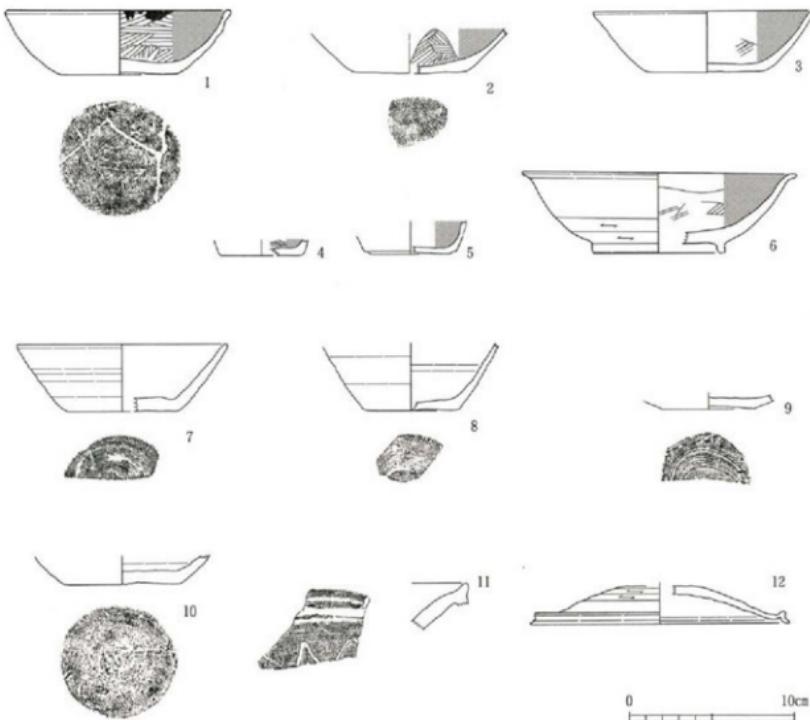


No	色調・土性	特徴	No	色調・土性	特徴
S1504			P-2		
1	10YR3/4暗褐色土	小礫を含む。地山粒を多量に含む。堅穴住居内埋土。	1	10YR3/4暗褐色シルト	地山粒を含む。板取六埋土。
2	10YR4/4褐色土	地山粒・ブロックを含む。周溝内埋土。	P-3		
P-1			1	10YR3/3暗褐色シルト	地山粒を含む。板取六埋土。
1	10YR3/4暗褐色シルト	地山粒・ブロックを含む。しまりが強い。振り方埋土。	P-4		
2	10YR3/3暗褐色シルト	地山粒を含む。板取六埋土。	1	10YR3/4暗褐色シルト	地山粒を含む。しまりが弱い。後成穴埋土。

第6図 SI504堅穴住居跡

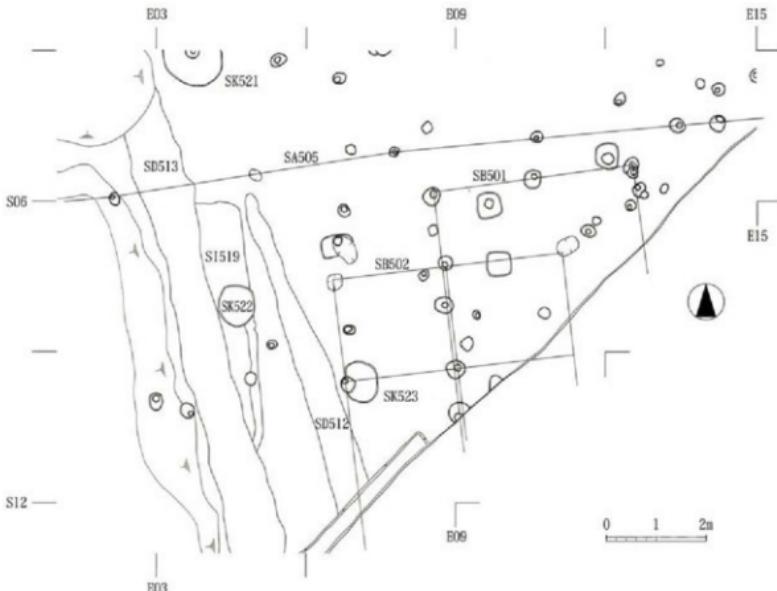
SI519堅穴住居跡

調査区南半部で検出した住居跡で、西側は攪乱によって大きく破壊されているため、わずかに東辺と北辺の一部を検出したのみである。本住居跡については平面的な調査にとどめている。SD513溝跡、SK522土壤と重複しており、これらより古い。規模は東西約85cm以上、南北約5.0mであるが、平面形は不明である。方向は東辺でN-6°-Wである。東辺の南側は住居内埋土が削平されているため床面の一部が露出しており、周溝が確認できる。幅は13~21cmである。



No.	造様	層位	種別	器種	特徴	口径 (既存年)	底径 (既存年)	周高	写真回数	登録番号
1	埋土	土師器	杯	【外面】ロクロナデ 茎部：回転赤切り→縫跡 【内面】ヘミガラ→底色焼→油煙付着	13.7 (12/24)	7.2 (24/24)	3.9	2-2	R-32	
2	埋土	土師器	杯	【外面】表面剥離部：底部：縫跡系切り 【内面】ヘミガラ→底色焼	- (6.0)	- (6.0)	-	-	R-34	
3	埋土	土師器	杯	【外面】ロクロナデ 底部：表面剥離 【内面】ヘミガラ→底色焼	13.4 (12/24)	7.4 (18/24)	3.7	2-3	R-33	
4	埋土	土師器	小型杯	【外面】表面剥離、底部：表面剥離 【内面】ヘミガラ→底色焼	- (5.0)	- (5.0)	-	-	R-38	
5	埋土	土師器	小型杯	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ヘミガラ→底色焼	- (8/24)	- (8/24)	-	-	R-37	
6	埋土	土師器	高台杯形	【外面】ロクロナデ→回転ヘラケズリ 底面：高台端部：ヘラ切り付け 【内面】ヘミガラ→底色焼	(16.6) (2/24)	(8.15) (10/24)	(4.9)	2-4	R-36	
7	埋土	須志器	杯	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(12.8) (1/24)	(6.6) (6.0)	4.1	-	R-44	
8	埋土	須志器	杯	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	- (4.0)	- (5.5)	-	-	R-43	
9	埋土	須志器	杯	【外面】ロクロナデ 底部：回転赤切り 【内面】ロクロナデ	- (13/24)	- (5.5)	-	-	R-47	
10	埋土	須志器	杯	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	- (24/24)	7.2 (15.6)	-	-	R-46	
11	埋土	須志器	甕	【外面】ロクロナデ→波状文 【内面】ロクロナデ	- (4/24)	- (4/24)	-	-	R-40	
12	埋土	須志器	甕	【外面】ロクロナデ→回転ヘラケズリ 【内面】ロクロナデ	- (15.6)	(15.6) (4/24)	-	-	R-49	

第7図 SI504堅穴住居跡 出土遺物



第8図 SB501・502掘立柱建物跡・SA505柱列跡

②掘立柱建物跡・柱列跡

調査区東端部の地山面で、掘立柱建物跡2棟、柱列跡1条を検出した。これらの遺構はすべて平面的な調査にとどめており、柱穴の断ち割りなどは行っていない。

SB501掘立柱建物跡

調査区東端部で検出した建物跡である。建物跡の南側が調査区外に延びる可能性もあるため、正確な規模は不明であるが、桁行2間以上、梁行2間の南北棟とみておきたい。北東隅の柱穴は抜き取られていたが、それ以外の柱穴では柱痕跡を確認した。方向は西側柱列でみるとN-6°-Wである。SB502掘立柱建物跡と重複しているが、柱穴に直接の切り合いがないことから新旧関係は不明である。桁行については、西側柱列で北より2.27m、2.27m、梁行については北妻で約4.05mであり、柱間は西より2.05m、約2.0mである。柱穴はすべて円形であり、直徑32~39cmである。柱痕跡は直徑12~19cmである。

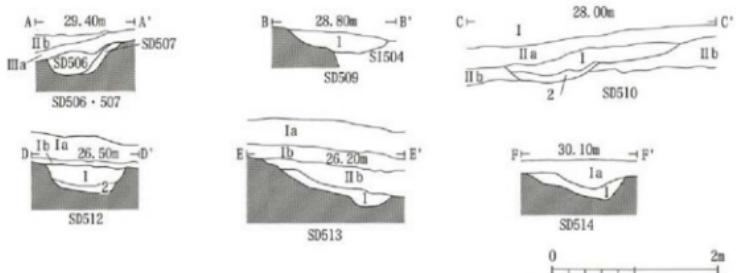
SB502掘立柱建物跡

調査区東端部で検出した建物跡である。建物跡の南側が調査区外に延びる可能性もあるため、正確な規模は不明であるが、桁行2間以上、梁行2間の総柱建物を想定しておきたい。検出した柱穴のうち、北東隅の柱と北西隅の柱は抜き取られていたが、それ以外のすべての柱穴で柱痕跡を確認した。SB501掘立柱建物跡、SD512溝跡、SK523土壙と重複しており、SK523より新しく、SD512より古い。SB501との新旧関

係は、柱穴に直接の切り合いかない事から不明である。規模は西側柱列の柱間が約2.1m、北側柱列は西より約2.2m、約2.4mである。方向は西側柱列でみると、N-6°-Wである。柱穴はすべて円形であり、直径28~38cmである。柱痕跡は直径11~14cmである。

SA505柱列跡

調査区南半部から東端部にかけて検出した、東西方向の柱列跡である。4間分を検出したが、西側は擾乱によって大きく破壊されており、東側も調査区外に延びる可能性があることから、さらに東西に延びていた可能性もある。西から1番目の柱穴では柱痕跡を確認できなかったが、それ以外の柱穴では柱痕跡を確認した。方向は検出した両端の柱穴でみると、E-7°-Nである。4間分の長さは約11.43mであり、柱間は西より約2.9m、約2.8m、2.84m、2.89mである。柱穴は円形であり、直径18~33cmであり、柱痕跡は直径10~13cmである。



No.	色調・土性	特徴	No.	色調・土性	特徴
SD506	IYR3/3暗褐色シルト	表面に多量の礫を含む。	SD512		
SD507	IYR3/3暗褐色シルト	小礫を含む。	1	IYR3/2暗褐色シルト	砂質分が多い。地山粒を含む。
SD509	IYR3/4暗褐色シルト	地山ブロックを含む。	2	IYR3/4暗褐色シルト	しまりが強い。
1	IYR4/4褐色シルト		SD513	I YR3/4暗褐色シルト	地山ブロックが含む。
SD510	1 YR4/4褐色シルト	しまりが強い。	SD514	1 YR4/4褐色シルト	地山粒を含む。
2	1 YR4/3暗褐色シルト	若干しまりがある。			

第9図 SD506・507・509・510・512・513・514溝跡断面図

③溝跡

溝跡の調査は平面的なものにとどめたが、部分的に断ち割り等を行った。規模等については、特に断りがない限り平面的な調査からの計測値である。

SD506溝跡

調査区北半部のIIIc層上面で検出した南北溝である。SD507・508溝跡と重複しており、これらより新しい。北側は調査区外に延びており、確認した長さは約15mである。方向はN-1°-Wである。断ち割った部分でみると、幅は77cmで、深さは20~28cmである。埋土には礫を多量に含んでいる。遺物は土師器、須恵器、軒平瓦(721B-a)、平瓦、灰釉陶器碗が出土している。

SD507溝跡

調査区北半部の地山面で検出した南北溝である。方向はN-2°-Wである。SD506・508溝跡と重複しており、SD508より新しく、SD506より古い。北側は調査区外に延びており、確認した長さは約6.1mである。断ち切った部分でみると、幅は55cm以上であり、深さは7~12cmである。



第10図 SD507溝跡 出土遺物

SD508溝跡

調査区北半部の地山面で検出した南北溝である。方向はN-36°-Eである。SD506・507溝跡と重複しており、それより古い。確認した長さは約4mで、幅は27~38cmである。

SD509溝跡

調査区北半部のIV層上面で検出した南北溝である。方向はN-4°-Wである。SI503・504竪穴住居跡、SK516土壤と重複しており、SI503・504より新しく、SK516土壤より古い。確認した長さは約13.8mで、幅は19~138cmである。断ち切った部分でみると、深さは10~33cmである。底面は南に向かって強く傾斜している。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕、鉄製品が出土している。

SD510溝跡

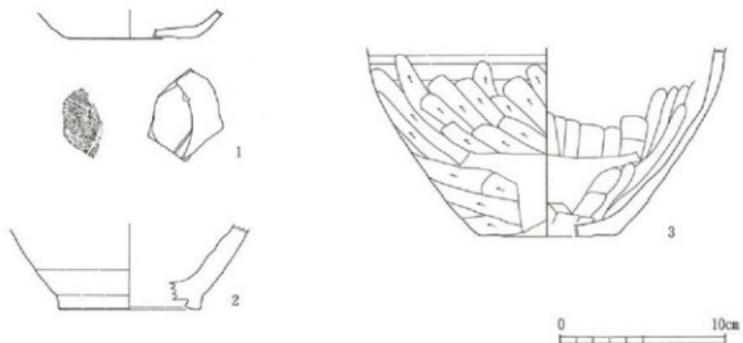
調査区中央部のII b層上面で検出した南北溝である。方向はN-13°-Wである。SD511溝跡と重複しており、これより新しい。南側は調査区外に延びており、確認した長さは約11.9mで、幅は37~72cmである。断ち切った部分でみると、深さは15~32cmである。遺物は出土していない。

SD511溝跡

調査区中央部のII b層上面で検出した南北溝である。方向はN-3°-Eである。SD510溝跡と重複しており、これより古い。確認した長さは約1.9mで、幅は24~27cmである。

SD512溝跡

調査区南半部の地山面で検出した南北溝である。方向はN-19°-Wである。南側は調査区外に延びており、確認した長さは約6.8mで、幅は32~72cmである。断ち切った部分でみると、深さは28~32cmである。遺物は出土していない。



第11図 SD509溝跡 出土遺物

SD513溝跡

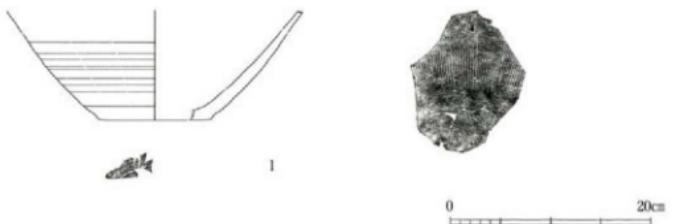
調査区南半部の地山面で検出した南北溝である。方向はN-14°-Wである。SI519竪穴住居跡と重複しており、それより新しい。南側は調査区外に延びており、確認した長さは約9.7mで、幅は69~117cmである。断ち割った部分で見ると、深さは6~20cmである。遺物は出土していない。

SD514溝跡

調査区北半部の地山面で検出した南北溝である。方向は南北基準線とほぼ一致している。北側は調査区外に延びており、確認した長さは約5.7mで、幅は24~121cmである。断ち割った部分で見ると、深さは14~20cmである。遺物は土師器、須恵器、近世陶器の擂鉢が出土している。

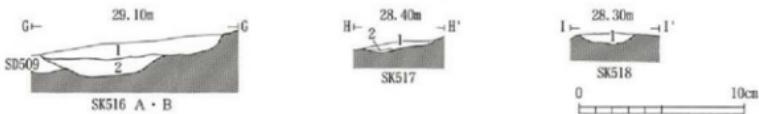
SD515溝跡

調査区中央部の地山面で検出した東西溝である。方向はE-20°-Nである。総長は2.13mで、幅は15~29cmである。



No.	遺構	層位	種別	面積	特徴	参考	口径 (残存高)	底径 (残存高)	層高	登錄番号
1	SD514	I-1	陶器	無	【外側】ロクロナデ 底部：回転ヘラケズリ 【内側】ロクロナデ→筋目	10世紀	-	(11.23) (3/24)	-	R-76

第12図 SD514溝跡 出土遺物



No.	色調・土性	特徴	No.	色調・土性	特徴
SK516A			SK517		
1	7.5YR0/4暗褐色シルト	堆山粒を多量に含む。	1	10YR3/4暗褐色土	堆山粒を少量含む。
SK516B			2	10YR2/3黒褐色粘質土	
2	7.5YR4/4褐色シルト	10YR4/4褐色粘質土を斑状に含む。	SK518		
			1	5YR4/6赤褐色シルト	10YR7/4に赤い黄褐色シルト粒を多量に含む。

第13図 SK516A・B・517・518土壤

④ 土壌

土壌の調査は平面的なものにとどめたが、精査に及んだものもある。深さや出土遺物について言及のない土壌は、断ち割り等を行っていない。それぞれの計測値は、平面的な調査から得たものである。

SK516土壌

調査区北半部の地山面で検出した、平面形が不整形の土壌である。新旧2時期(B→A)の重複がある。SD509溝跡と重複しており、これより新しい。SK516Aは規模が長軸2.37m、短軸1.56m、深さは20~23mである。埋土は地山粒を多量に含むことから、人為的に埋められたものとみられる。SK516Bは規模が長軸1.1m、短軸91cm、深さ18~22cmである。埋土は粘質土を斑状に含むことから、人為的に埋められたものとみられる。遺物は、SK516Aからは土師器、須恵器、近世以降の磁器が出土し、SK516Bからは土師器、須恵器が出土している。

SK517土壌

調査区北半部の地山面で検出した円形の土壌である。SD506溝跡と重複しており、これより新しい。規模は直径81~95cm、深さ6~10cmである。遺物は土師器、須恵器が出土している。

SK518土壌

調査区北半部の地山面で検出した不整形の土壌である。SI503竪穴住居跡と重複しており、これより新し

い。規模は長軸79cm以上、短軸67cm、深さは13cmである。遺物は土師器、須恵器が出土している。

SK520土壤

調査区南半部の地山面で検出した方形の土壤である。SD510溝跡と重複しており、これより新しい。規模は長軸83cm、短軸78cmである。

SK521土壤

調査区南半部の地山面で検出した円形の土壤である。規模は直径1.17mである。

SK522土壤

調査区南半部の地山面で検出した梢円形の土壤である。SI519竪穴住居跡と重複しており、これより新しい。規模は、長軸84cm、短軸72cmである。

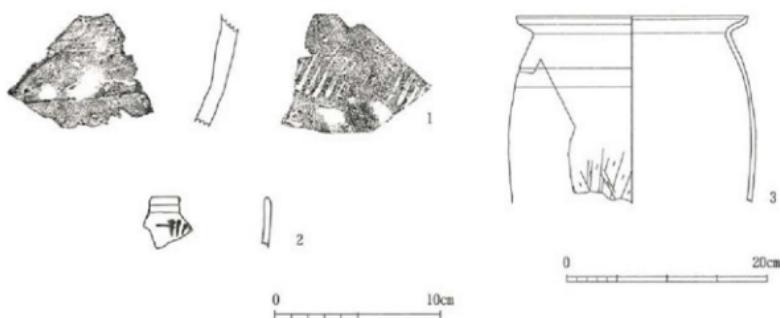
SK523土壤

調査区東端部の地山面で検出した梢円形の土壤である。SB502掘立柱建物跡と重複しており、これより古い。規模は長軸82cm、短軸64cmである。

SK524土壤

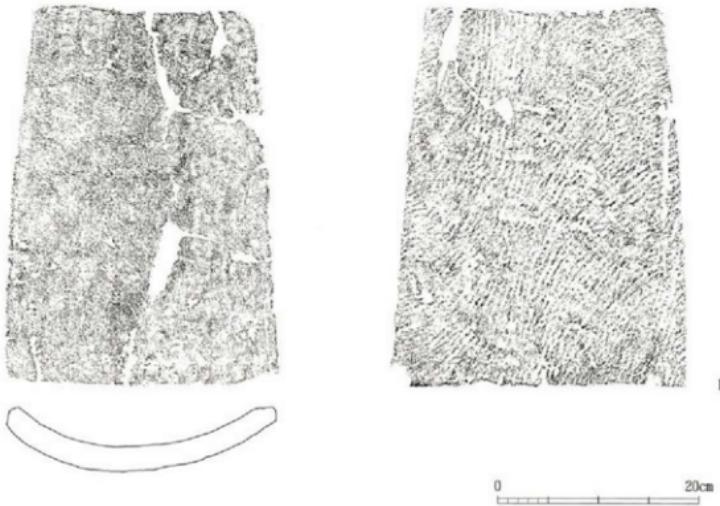
調査区中央部のII b層上面で検出した不整形の土壤である。SD510溝跡と重複しており、これより新しい。規模は長軸69cm、短軸48cmである。

⑤遺溝外出土の遺物



No.	層位	種類	断縁	特徴	参考	口径 (残存率)	底径 (残存率)	高さ	写真図版	登録番号
1	II b	無釉陶器	直	【外縁】ロクロナデ→ナデ→平行文押印 【内縁】ロクロナデ	中世・東海道	—	—	—	Z-8	R-96
2	II b	磁器	直	【外縁文様】不明 【内縁文様】なし	近世	—	—	—	—	R-97
3	I a	土師器	直	【外縁】ロクロナデ→ヘラケズリ 【内縁】ロクロナデ→ナデ	—	(23.1) (0/24)	—	—	—	R-84

第14図 遺構外出土の遺物(1)



年	層位	種別	特徴	参考	写真図版	登録番号
I	I b	平底	【凹面】素切り痕→布目→ナデ【凸面】織目タクキ	II B型-αタイプ	-	R-92

第15図 遺構外出土の遺物(2)

3 考 察

ここでは、今回の調査で発見した遺構について時代ごとに重複関係を整理しながら、遺構の年代を検討してみたい。

<古代>

精査を行ったSI503とSI504は重複関係があり、SI503→SI504の変遷を確認できた。いずれの出土遺物も埋土からの出土である。しかも、遺構の半分以上が削平されているため、残存部分の資料だけで年代比定をすることは難しいが、遺構の存続年代を考えるうえで参考となるので、以下若干の検討をしてみたい。

SI503、SI504ともに、土師器杯はロクロ調整されたものだけが出土しており、非ロクロ調整のものは一切含まれていない。これは白鳥良一氏による多賀城跡出土土器の分類（註2）で、9世紀前半頃に比定されているC群土器以降にみられる特徴である。近年、多賀城跡大畠地区の発掘調査から出土土器の変遷が詳細に検討されているが、SI503及びSI504出土遺物の特徴は、第62次調査における第I群土器・第II群土器の要素（註3）、第65次調査における第I群土器・第2群土器の要素（註4）のいずれにもあてはまるもので、概ね9世紀代のものであろうとしかいえない。また、出土遺物中に10世紀初頭前後から出現するとされる須恵系土器が一切含まれていないことから、これらの竪穴住居跡はおおよそ9世紀代にSI503→SI504と変遷し、SI504は10世紀初頭に至らずに廃絶したものとみられる。

SI504を覆う堆積層IV層及び、IV層を掘り込むSD509は重複関係があり、SI504→IV層→SD509の変遷が確認できた。いずれも、10世紀前葉に降下したとされる灰白色火山灰を含まず、遺物に須恵系土器が含まれていないことから、IV層及びSD509は9世紀末～10世紀初頭までに堆積ないし埋没したものと考えられよう。

SD506からは均整唐草文軒平瓦721B-aが出土しており、この瓦の製作年代が9世紀後半とされていることから、SD506は9世紀後半以降に掘削されたものと推定できる。また、SD506の精査部分の出土遺物には須恵系土器が含まれていないことから、埋没年代は概ね9世紀後葉から10世紀初頭とすることができよう。

SD507、SD508、SK517はSD506との重複関係から、SD508→SD507→SD506→SK517という変遷が確認でき、SD507、SD508はおおよそ古代の遺構とみることができよう。SK517は精査したものの、地山面検出であり、年代比定可能な出土遺物がないことから、時期不明である。

SI519、SD513およびSK521は重複関係があり、SI519→SD513・SK521という変遷が確認できた。SD513、SK521は精査に及んでいないため、年代は不明である。

SB501、SB502、SK522は重複関係があり、SK522→SB502の変遷は確認できたものの、SB501とSB502の変遷については確認できなかった。どちらの建物跡も柱穴の掘り方が小さく、古代の建物跡とは異なる印象を与えるが、どちらもSI519と同様の方向(N-6°-W)であることから、おおよそ古代の建物跡ととらえておきたい。

<近世>

近世の遺構と考えられるのは、SD514である。SD514から出土した近世陶器の擂鉢は、第8次調査SD446出土の陶器擂鉢と胎土や調整が近似しているもので、ほぼ18世紀代のものとみられる(註5)。よって、SD514は18世紀以降の溝跡であるといえよう。

SD510は、近世以降の磁器が出土した堆積層II b層を掘り込んでいることから、精査はしていないものの、おおよそ近世以降の溝跡と考えられる。SD510はSD511、SK521、SK523と重複関係があり、SD511→SD510→SK521・SK523という変遷が確認できた。SD511もII b層を掘り込んでいるので、近世以降のものとみられ、SK521・523も同様に近世以降のものと考えられよう。

SK516Aからは近世以降の磁器が出土していることから、近世以降のものと考えられる。これに先行するSK516Bは年代を確定する遺物は出土していないが、SK516Aからそれほど時期を離らない年代の遺構ととらえておきたい。

なお、SA505、SD515、SK520はいずれも地山面で検出しており、他の遺構との重複関係もないために年代比定は難しく、年代不明としておきたい。

4まとめ

1. 古代の遺構とみられる掘立柱建物跡2棟、竪穴住居跡3軒、溝跡4条、土壙1基を発見した。年代は竪穴住居跡2軒が9世紀とみられる。
2. 近世以降とみられる溝跡3条、土壙4基を発見した。年代は溝跡の一つが18世紀以降とみられる。
3. その他、柱列跡1条、溝跡1条、土壙2基を発見したが、年代は不明である

(註1) 愛知県三好町教育委員会『黒笹116・117号窓発掘調査報告書』1994年

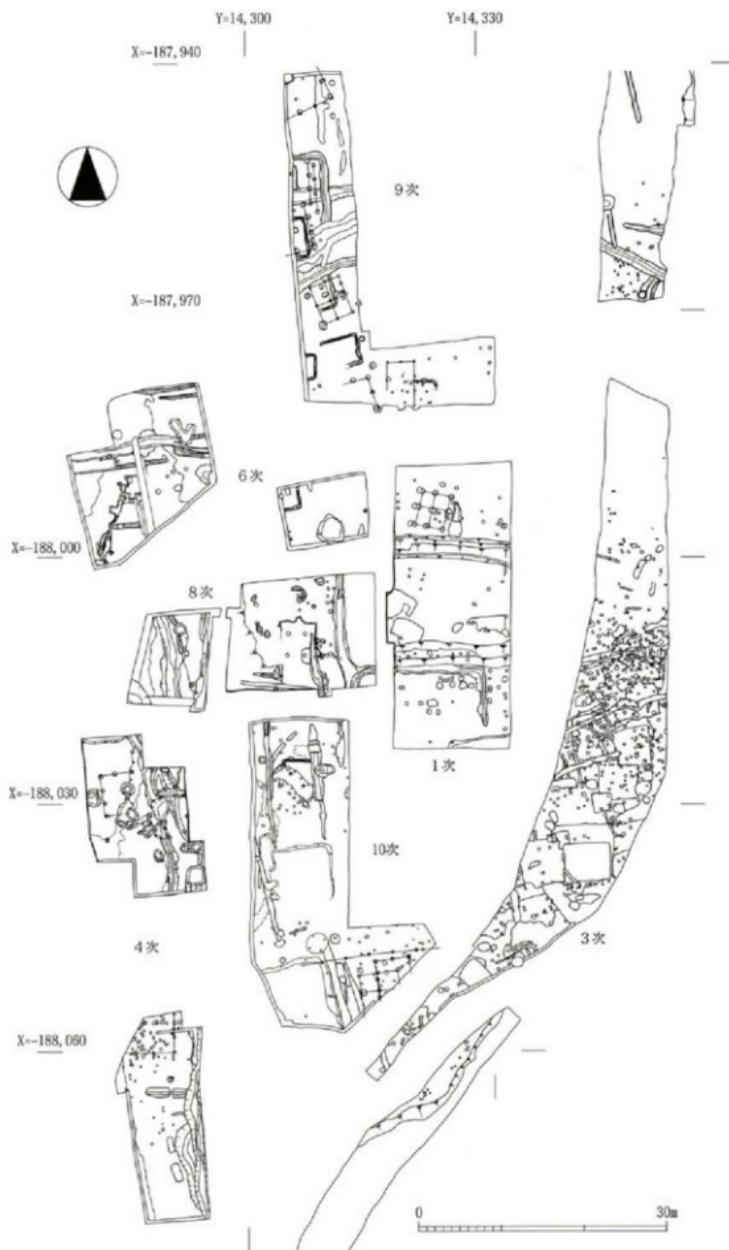
具体的には、9世紀第3四半期頃に比定される黒笹116号窓跡出土の灰釉陶器焼成類に、器形の特徴が近似している。

(註2) 白鳥良一『多賀城跡出土土器の変遷』『宮城県多賀城跡研究所研究記要 VII』1980年

(註3) 宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1992』1993年

(註4) 宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1994』1995年

(註5) 多賀城市教育委員会『多賀城市文化財報告書第58集 西沢遺跡 第8次調査報告書』2000年



第16図 本次調査区と周辺調査区の位置図



調査前の状況（北西より）



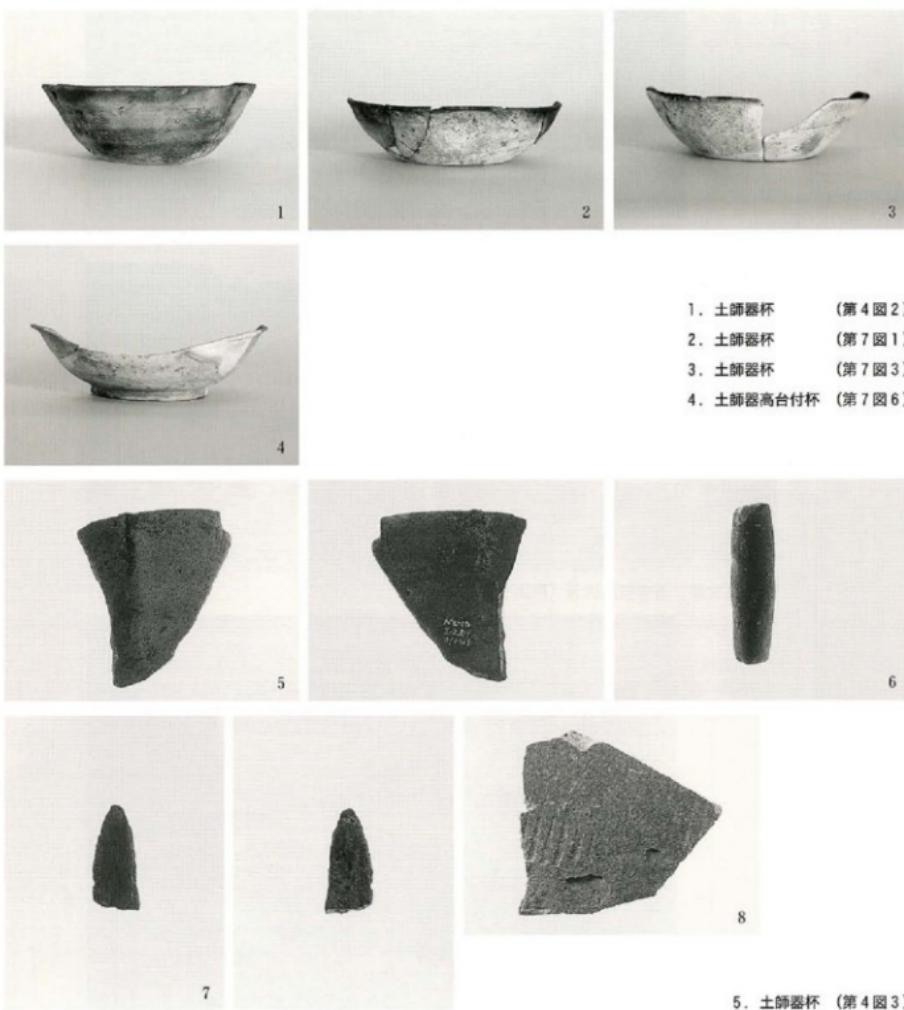
調査区全景 遺構検出状況（南より）



（南西より）



SI503・504全景（西より）



多賀城市西沢遺跡第10次調査出土鉄滓の分析・調査

川鉄テクノリサーチ株式会社 分析・評価事業部

埋蔵文化財調査研究室

岡原正明・小川太一

1. はじめに

多賀城市埋蔵文化財調査センターが発掘調査した西沢遺跡第10次調査発見のSI503から出土した須恵器片に付着した鉄滓状の資料について、学術的な記録と今後の調査の一環として分析調査の依頼があった。調査の観点として、①付着物は鉄滓かどうか②鉄滓であれば製鉄原料の推定や製造工程上の位置付け③観察上の特記事項などを中心に調査をすることにした。その結果について報告する。

2. 調査項目および試験方法

(1) 調査項目

資料の性格前⇒後	出土遺構	重量 g	着磁力	成分分析	胎土分析	外観写真
須恵器付着鉄滓⇒須恵器溶融片	SI503	191.0	弱	変色部 ◎ 4	○	○

注 ①資料の性格は貴センターの資料に基づいた。

②資料の性格の項で⇒後の性格は調査・考察の結果に基づくものである。

③外観写真中の○中の数字は推定位置数を示す。

(2) 重量計測と着磁度調査

計重は電子天秤を用いて行い、少数点1位で四捨五入した。着磁度調査については、直径30mm・1300ガウス(0.13テスラ)のリング状フェライト磁石を使用して感応検査により5段階で評価した。

(3) 外観の観察と写真撮影

調査に入る前に、資料の両面をmm単位まであるスケールを同時に写し込みで撮影した。

(4) 化学成分分析(蛍光X線分析法)

通常、資料から分析必要量の試料を採取して化学分析するが、今回の資料は現状の姿を残したいとの要望から、堀場製作所螢光X線元素分析装置(MESA-500)を用いて完全非破壊分析を行った。この装置は測定室が直径150mm、高さ70mmであるため、今回の資料はそのまま測定部に設置可能であった。

3. 調査および考察結果

提供された資料は理土中から採集された溶融部のある須恵器片である。長径87mm短径75mm内厚7mm、梢円形になった灰色の須恵器底部の一部が変色溶融している資料で乳白色・黒灰色・橙灰色に溶融し層状に部分発泡した様相を呈する。須恵器の表面周辺は帆立貝の殻状に丁寧に剥離しているように見える。何かを搔き取るためにへら状に加工されているのではないかとの意見もあった。溶融部との関連も気になるが、円弧内面や内面に近い縁部には付着しない。溶融部の断面はバニ皮のように層状に発泡し、片減りして薄くなっている。須恵器胎土と溶融物との境界は浅く盛り上がり、乳灰色部分には被熱融溶物が白色になって、ガラス化した黒い溶融物の中に存在する。肉薄部は、溶融部側から溶融→発泡→割落があり熱変化を受けたものであろう。用途・溶融理由は不明である。胎土・変色部等計4ヶ所で分析を試みたが、その結果によると化学成分の差は少なく、鉄滓等が付着したものではないことが判明した。

表1 各変色部における主要成分分析値

	SiO ₂	Al ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	TiO ₂	MgO	計
底 部	66.191	17.046	4.154	5.137	2.844	1.813	1.060	1.021	99.266
灰 色	65.380	14.729	5.354	4.862	5.736	0.710	0.931	1.832	99.534
黒 色	60.110	19.120	8.531	3.382	5.589	0.703	1.022	0.979	99.436
茶 色	65.264	22.119	5.386	1.614	1.219	1.671	1.231	1.188	99.692

また、胎土の検討は、標準鉱物試料(国土地理院地質調査所・JG-1a)を基準に三辺利一の方法に従って実施した。その結果、須恵器の胎土は西日本のものとは異なり、福島県で出土した羽口粘土に近い値を示しているが、近傍の粘土の分析データがないため確定的なことは言えない。

4.まとめ

非破壊分析による調査ということで、調査方法が限定されていたため、次のような知見を得られた。

①須恵器に付着していると思われる変色部は、鉄滓ではない。

②変色部は須恵器が燃熱されて部分的に溶融・発泡したもので、今回の調査手法では、溶融のメカニズムは解明できないが、融点を下げるカリウム(K)およびナトリウム(Na)等の影響ではないかと考えられる。耐火度試験が必要。

③薄くなかった部分で層状に変色している部分と表面の発泡部とは、同系であり何らかの因果関係があると思われる。

④須恵器に使用された粘土(胎土)は西日本のものとは異なり、東日本の福島近傍のものに近い可能性がある。

5. 参考文献

- (1) 三辻利一 :「須恵器のケイ光X線分析法」: X線分析の進歩 [10] p.61~ (1979)
- (2) 三辻利一 :「土器の产地を求めて—ケイ光X線分析法と放射分析」: 続考古学のための化学10章 東京大学出版会
- (3) 川鉄テクノリサーチ株式会社 : 調査報告書より抜粋

6. 追加分析報告

追加分析報告として黒色部について、電子顕微鏡を用いて分析した結果と組織写真観察の結果について報告する。

(1) 試料採取位置と外観観察

指定場所の近傍の黒色光沢のある部分から $1.2\text{mm} \times 1.5\text{mm}$ 程度の試料をステンレス針を用いて採取した。

写真2 拡大写真に指定場所（O印）と試料採取場所（矢印）を示す。

(2) 電子顕微鏡SEM/EDXによる観察

採取した試料を試料台に固定し、黒色部および白色部の順に分析を行った。写真3は60倍に拡大した写真である。分析は黒色ガラス質部分および表層白色部について行った。黒色部の分析結果のスペクトルおよび分析結果を図1および白色部は図2に示す。以上のように鉄滓に含まれる鉄分(Fe)は非常に少なく、須恵器胎土にふくまれている珪素(Si)やアルミニウム(Al)は多量に検出され、黒色部および白色部も大差がない。

(4) 顕微鏡組織観察結果

採取した試料を樹脂に埋め込み、微細研磨剤を用いて鏡面研磨したのち、顕微鏡で観察しながら、代表的な組織を $\times 100$ および $\times 400$ で撮影した。今回の組織写真では、鉱物に（粘土鉱物や軽鉱物）良く見られる溶融したガラス質の組織であり、鉄滓の性状を示していない。

(5) まとめ

以上から、今回須恵器に付着していた黒色溶融ガラス質部質は、当初の報告のとおり、製鉄工程で発生した（製錬炉・精錬炉・鍛冶炉を含む）ものではなく、須恵器が何らかの理由で高温被熱し溶融したものと断定出来る。

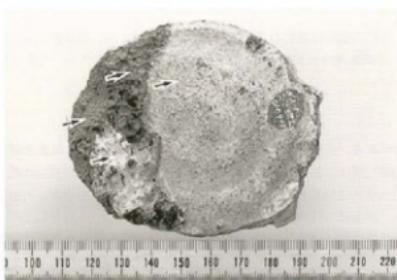


写真1 外観写真



写真2 試料採取位置



写真3 電子顕微鏡写真

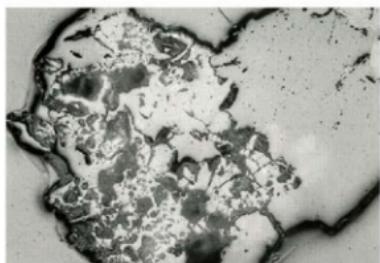


写真4 付着物質組織写真×100 (60%縮小)



写真5 付着物質組織写真×400 (60%縮小)

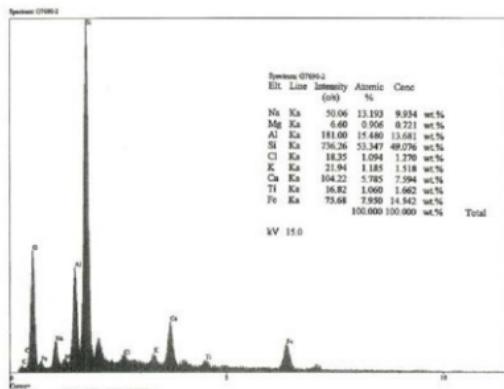


図1 付着物質 黒色部スペクトルと分析結果

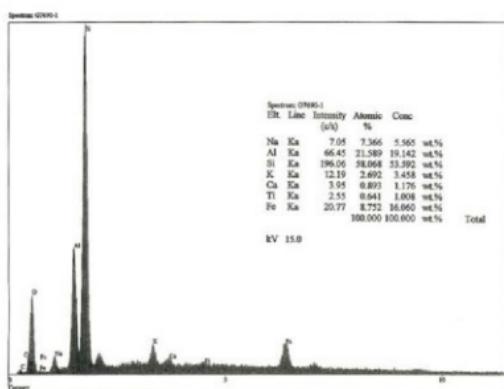


図2 付着物質 白色部スペクトルと分析結果

III 山王遺跡 第38次調査

1 調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴うものである。当該地は山王遺跡の範囲内であり、今回の基礎工事は、細い鋼管を打ち込んで地盤沈下を防止するパイプ工法をとることから、地下遺構に影響を及ぼすことが考えられた。

そのため、9月3日に地権者より調査依頼を受け、施工業者、文化財課、埋蔵文化財調査センターの三者で協議を行い、調査することになった。

調査は、当初平成13年9月10日より開始する予定であったが、台風15号の影響で9月12日より重機による表土除去作業を開始した。9月13日に遺構検出作業を行い、調査区全体の遺構検出状況写真を撮影した。その後1/20の平面図を作成し、北壁及び西壁の断面図を作成した。9月17日、堅穴住居跡の周溝と2条の溝跡の一部を掘り下げて土層堆積状況を確認し、土層の注記を行って調査を終了した。調査完了後、工事及び安全面等を考慮し、9月18日に重機による埋め戻しを行った。

2 発見遺構

層序

第Ⅰ層は現代の盛土で層厚80~130cm、第Ⅱ層は黒褐色粘質土で層厚10~45cmである。第Ⅲ層（地山）は灰オリーブ色土で、本調査で発見した遺構は全て第Ⅲ層上面で検出した。

(1)堅穴住居跡

調査区西端で発見した住居跡で、周溝と貼床を検出したのみである。平面形は西側が調査区外に延びるために不明である。東辺の長さは約3mである。住居の方向は東壁についてみればほぼ真北である。埋土は周溝がオリーブ黒色土で、貼床は黄灰色土である。カマドと柱穴は発見することはできなかった。遺物は出土していない。

(2)溝跡

SD1052溝跡

調査区中央部で発見した南北溝である。南北両端とも調査区外に延びており、確認できた長さは4.7mである。規模は、上幅が69~94cm、深さが16cmである。断面は皿状で、埋土は黄灰色土である。遺物は出土していない。



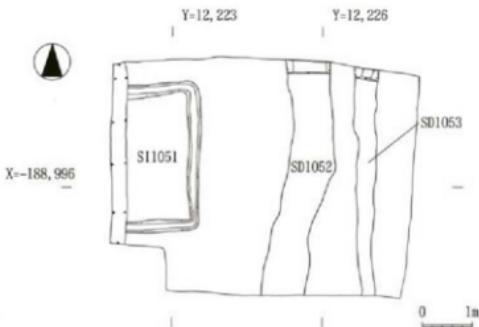
第1図 調査区位置図

SD1053溝跡

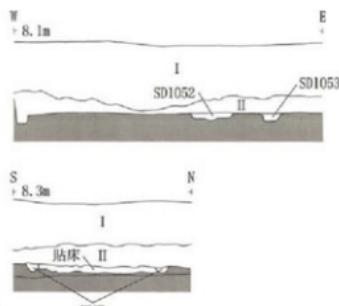
調査区東側で発見した南北溝である。南北両端とも調査区外に延びている。確認できた長さは4.5mである。規模は上幅26~45cm、深さは15cmである。断面は逆台形状で、埋土は暗灰黄色土である。遺物は土師器片を2点発見したが、どちらも磨耗が激しく調整は不明である。

3まとめ

1. 本調査区では、竪穴住居跡1軒、溝跡2条を発見した。
2. 遺構の年代は不明である。



第2図 遺構配置図



第3図 調査区北壁・西壁断面図



調査区全景（南より）

IV 新田遺跡 第21次調査

1 調査に至る経緯と経過

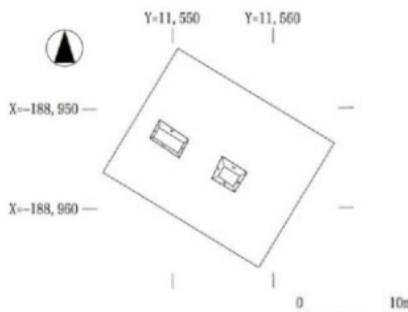
本調査は個人住宅建設に伴うものである。平成13年8月10日に、只野俊雄氏より当該地での住宅建設計画の申請があった。

建設対象地は新田遺跡の境界付近に位置し、昭和40年代まで用水池であったことが知られていたが、近隣の調査区では現地表下約3mの地点から縄文時代晚期～弥生時代の遺構・遺物が発見されていた。今回の建築計画は住宅の基礎工事にバイル工法を用い、地盤改良工事も併せて行うことから、予想される地下遺構への影響が懸念された。そのため、9月12日に施工業者・文化財課・埋蔵文化財調査センターの三者で協議を行い、発掘調査を行うことで合意が得られたため、事前調査として実施するに至ったものである。9月14日に発掘調査依頼文書が提出されたことを受けて、9月25日より調査を開始した。

調査は、はじめに住宅基礎工事で破壊される範囲内の約7m²を重機で坪掘りした。掘削予定深度である地表下1.5m（標高5.3m）まで掘り下げても遺構は発見されず、用水池の埋め立て土か続くだけであった（註1）。さらに、もう一ヶ所坪掘りしたが結果は同様であり、遺構は存在しないと判断した。掘削箇所の湧水が著しいため、写真撮影後、図面を作成して、直ちに埋め戻し、調査を終了した。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図



第3図
昭和36年（1961）当時の調査区周辺の様子
埋め立て以前の用水池「長生沼」が写っている。

この空中写真（昭和36年撮影）は、国土地理院長の承認を得て、同院撮影の空中写真を掲載したものです。（承認番号 平13東復第480号）

2まとめ

1. 調査の結果、遺構の存在は確認されなかった。
2. 旧用水池の範囲内では相当の深度まで掘削しているため、地下遺構が破壊されている可能性が高い。

3付章 一調査対象地区の用水池について

今回発掘調査を行った旧用水池について、その歴史的経緯について簡単にまとめておきたい。

旧用水池については、資料調査や聞き取り調査などから、その形成が太平洋戦争中に遡ることがわかつた。この用水池掘削の直接の原因は、戦時に旧国鉄が行った東北本線の複線化工事であった。旧国鉄は日中戦争の戦線拡大と太平洋戦争開戦による輸送需要の増加に対応するため、重要路線の輸送力増強を計画し、勾配改良を含む複線化工事を実施した。東北本線では岩切-石越間の複線化及び勾配改良工事が昭和18年（1943）4月に着工された（註2）。この時、現在の東北本線岩切-品井沼間ルートの軌道新設に伴う路盤工事に多量の土砂が必要となったが、戦時下の労働力不足や作業効率向上などの諸事情から、当該地一帯が土砂採取場所に選定され、旧国鉄に接収された。当時の当該地周辺は田畠として利用されているだけだった（註3）。その後、複線化工事は翌昭和19年11月15日に単線のみ開通している。土砂採取跡地は灌漑用水池として利用され、南宮地区に農業用水を供給し、戦後は「長生沼」と呼ばれて利用され続けた。農閑期には水抜きされ、最深部で6m程度はあったとされる（註4）。高度経済成長期に入り、用水系の改修整備等に伴って用水池の必要性が低減したことや、接収地の元所有者が組織した「旧地主会」主導で国からの用水池払い下げが実現したこと等を契機として、用水池の埋め立てが行われたようである。当該地一帯の道路計画が本市都市計画課に提出されたのは昭和43年（1968）であり、それまでには用水池の埋め立て工事が完了していたものと思われる（註5）。その後、宅地開発が進み、現在に至つたものである。

（註1）本調査区に近接する新田遺跡第5次調査では、地表下約1m程度、標高6m前後で近世頃の遺構面に到達することが確認されており、標高5.3mではすでに古代の遺構面に到達する深度である。

（註2）日本国有鉄道仙台駅在理事室『ものがたり 東北本線史』1971年 694～700頁

日本国有鉄道『日本国有鉄道百年史』第11巻 1972年 280～282頁、287～288頁

（註3）明治19年（1886）調製 南宮村字一里塚地籍図では、地目が田・畠となっている。また、当該地周辺の聞き取り調査でも同様の結果が得られている。聞き取り調査を快諾していただいた大友長夫氏、松浦正氏（ともに本市南宮在住）、菅原辰夫氏（仙台市宮城野区岩切在住）に改めて謝意を表したい。

（註4）本市生涯学習課長相澤明氏のご教示による。農閑期の水抜きの際、バーチカルポンプを2～3段組にして排水していたことから、最深部では6m程度はあっただろうということである。

（註5）用水池埋め立ての直接の記録は見出せなかったため、本市に提出された道路計画から埋め立て時期を推測したものであることを断つておく。

V 矢作ヶ館跡 第1次調査

1 調査に至る経緯と経過

平成13年8月22日、鈴木文雄氏から当該地における宅地造成計画の提示があった。造成計画は多賀城・塩竈両市にわたる約8000m²を対象とし、現状を著しく改変するものであることから、関係各機関の協議が必要と判断された。

関係者協議は9月18日に現地において行われた。地権者、開発業者、宮城県教育庁文化財保護課、塩竈市教育委員会生涯学習課、文化財課、埋蔵文化財調査センター各担当者が集まり、当該地の地表面観察を行ったところ、城館跡に特徴的にみられる防御施設（土壘・切岸・堀など）や平場などは確認されず、遺物も採集できなかった。また、土層堆積状況確認のため、数箇所で坪掘りを行ったところ、表土（現耕作土）下10~20cm程度で地山岩盤に達することが判明したが、発掘調査よって遺構の有無を確認する必要があるとの見解に達した。調査については、対象範囲が多賀城・塩竈両市に及ぶことから合同で実施することとし、塩竈市分については宮城県教育庁文化財保護課の指導・協力を得て対応することになった。同日、地権者より発掘調査承諾書が提出され、これを受けて10月4日より調査を開始した。

調査区は開発対象範囲内の丘陵斜面に沿うように設定し、東側から順次番号（1~16T）をつけ、重機による表土除去作業を行ったところ、北東側斜面では遺構は発見できなかった。中央部の平坦地から南西側斜面にかけては堅穴住居跡、掘立柱建物跡、溝跡、土壤などを検出し、遺物も発見した。遺構を発見できなかった調査区については、写真撮影や図面作成の後、直ちに埋め戻し作業を行った。遺構を検出した調査区については、写真撮影後、トータルステーションを利用して平面図を作成し、翌5日に遺構のレベル計測を行って図面作成作業を終了した。その後調査区を埋め戻して、すべての調査を終了した。

2 調査成果

今回の調査では、堅穴住居跡4軒、掘立柱建物跡1棟、溝跡5条、土壤2基などを発見した。以下、調査区ごとに発見した遺構について記載する。なお、発見した遺物はごく少量であるため、発見した調査区でのみ、遺物について言及する。

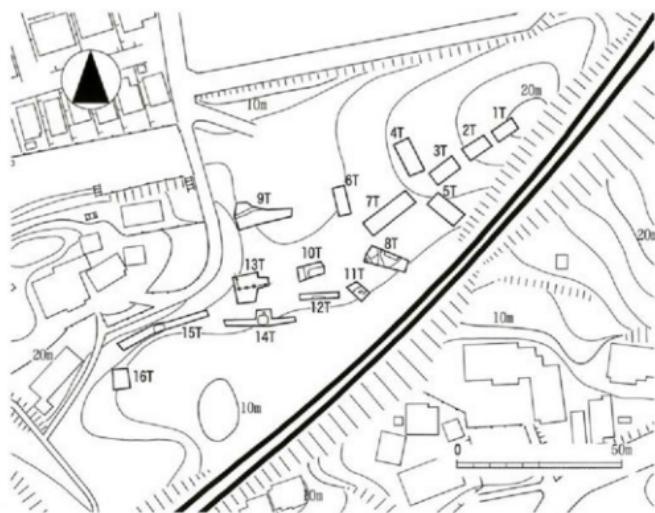
1~7・16T

表土下10~30cmで地山面が現れたが、遺構・遺物は発見されなかった。

8T 表土下10~40cmの地山面で堅穴住居跡1軒、溝跡3条を検出した。溝跡と堅穴住居跡では後者の方が新しい。堅穴住居跡の規模は、東西約5mである。



第1図 調査区位置図



第2図 調査区配置図

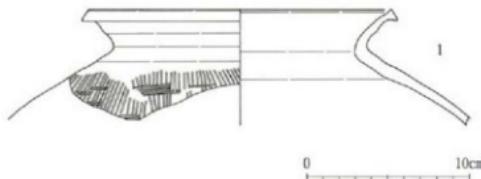
9T 表土下30~60cmの地山面で溝跡1条を検出した。

10T 表土下20cmの地山面で溝跡1条を検出した。

11T 表土下20~40cmの地山面で性格不明遺構1基、土壤2基を検出した。性格不明遺構と土壤では後者の方が新しい。

12T 表土下40~60cmの地山面で竪穴住居跡1軒を検出した。竪穴住居跡の規模は、東西約4mである。

検出面から須恵器甕片1点が出土している。(第3図参照)



編 号	層位	種別	部種	特徴	口径(残存率)	底径(残存率)	厚さ	写真図版	登録番号
12T	検出面	須恵器	甕	【外面】ロクロナデ→平行タクキ 【内面】ロクロナデ	(18.4) (2/24)	-	-	-	R-1

第3図 12T 出土遺物

- 13T 表土下10～20cmの地山面で掘立柱建物跡1棟を検出した。東西3間、南北1間分を検出したにすぎないが、桁行3間以上の東西棟の可能性がある。柱穴の掘り方は大きいもので一辺約80cmの方形である。柱穴の規模や形状から、古代の建物跡と考えられる。
- 14T 表土下20～40cmの地山面で竪穴住居跡1軒を検出した。平面形は方形で、規模は一辺約3mである。北辺に煙道も検出しており、長さは約1.5mである。検出面より須恵器壺片1点が出土している。
- 15T 表土下10cmの地山面で竪穴住居跡1軒を検出した。規模は東西約3.5mである。検出面から土師器壺片1点が出土している。

3まとめ

1. 今回の調査では、竪穴住居跡4軒、掘立柱建物跡1棟、溝跡5条、土壙2基、性格不明遺構1基を検出した。遺物は、須恵器壺片2点、土師器壺片1点が出土している。
2. 竪穴住居跡や掘立柱建物跡は、古代の遺構とみられる。
3. 本調査では『風土記御用書出』(1774年)の宮城郡留ヶ谷村風土記に記される、古館「屋はきか館」に直接関連する遺構・遺物は発見されなかった。

報告書抄録

ふりがな	にしざわいせきほか							
書名	西沢遺跡ほか							
講書名	西沢遺跡第10次 山王遺跡第38次 新田遺跡第21次 矢作ヶ館跡第1次							
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第66集							
編著者名	石川俊英・高橋圭藏・若松啓文							
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒985-0873 宮城県多賀城市中央二丁目27番1号 TEL022-368-0134							
発行年月日	西暦2002年3月25日							
所取遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
西沢遺跡 (第10次調査)	宮城県 多賀城市 市川字伊保 石地内	042099	18017	38度 18分 9秒	141度 59分 49秒	平成13年 8月23日 ~ 9月27日	481m ²	個人住宅 建設
山王遺跡 (第38次調査)	宮城県 多賀城市 山王字西町 浦34-32	042099	18013	38度 17分 50秒	140度 58分 20秒	平成13年 9月12日 ~ 9月18日	28m ²	個人住宅 建設
新田遺跡 (第21次調査)	宮城県 多賀城市 山王字一里 塚25-5	042099	18012	38度 17分 51秒	140度 57分 55秒	平成13年 9月25日	13m ²	個人住宅 建設
矢作ヶ館跡 (第1次調査)	宮城県 多賀城市 留ヶ谷二 丁目地内	042099	18029	38度 17分 51秒	141度 00分 38秒	平成13年 10月4日 ~ 10月5日	817m ²	宅地造成
所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
西沢遺跡 (第10次)	集落跡	平安時代 近世	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 柱列跡・溝跡 溝跡・土壤	土師器・須恵器 灰釉陶器・瓦 鉄製品 擂鉢				
山王遺跡 (第38次)	集落跡		竪穴住居跡 溝跡					
新田遺跡 (第21次)	集落跡							
矢作ヶ館跡 (第1次)	城館跡	古代	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 溝跡・土壤 性格不明遺構	土師器 須恵器				

多賀城市文化財調査報告書第66集

西沢遺跡ほか

—西沢遺跡第10次—

—山王遺跡第38次—

—新田遺跡第21次—

—矢作ヶ原跡第1次—

平成14年3月25日発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター

多賀城市中央二丁目27番1号

電話 (022) 368-0134

発行 多賀城市教育委員会

多賀城市中央二丁目1番1号

電話 (022) 368-1141

印刷 今野印刷株式会社

仙台市若林区六丁の目西町4-5

電話 (022) 288-6123
